《校訓》金剛石の光を発揮し
まわりを照らせ

六中だより

平成３０年１月１２日
第２０号
文責
八代市立第六中学校
校長　杉田　明

学校教育目標　:夢や目標に向かって、心磨き・体磨きを土台とし、自ら考え、学ぶ生徒の育成
ス ロ ー ガ ン　:「キラッと輝く六中　①一生懸命がかっこいい　②継続は力なり」

二学期の反省と三学期の目標

三年　鍛島

私は二学期、だらけてしまうことや、自分に甘く諦めてしまうことがありました。そして、受験が近いということに実感がわかず、ついつい一日の学校生活を無駄にしてしまうこともありました。

また、勉強をしないといけないと思っていても、やる気が出ない、分からないなどと、自分の嫌なことから逃げていて、分かろうとする努力もしていませんでした。私は何でもすぐ諦めることがよくあって、自分の嫌いなことから逃げて、すぐ楽な方に流れていました。

だから、三学期の一つ目の目標は、自分の苦手なことでもすぐ諦めるのではなく、やってみることです。そして、やってみて難しかったり、分からなかったりしたら、先生や友達に聞くということを身に付けようと思います。自分が楽をすると苦労が増え、逆に苦労をすると楽が増えるので、私は三学期、苦労を沢山して、楽を貯めておこうと思います。

そして、二つ目は受験に向けてです。これは自分の将来に向けての第一歩であるとともに、初めての大きな試練でもあります。受験は今までのような甘い考えでは乗り越えられない壁だと思うので、心を入れ替えて受験当日まで、一日一日の授業や家庭学習を大切にし、悔いを残さないように精一杯頑張っていきます。そして、受験は面接と作文があるので、普段から話し方に気を付けて練習をしようと思います。こういった受験に向けての対策を自分自身でしっかりとし、受験当日は今までやってきたものがすべて出し切れるよう頑張ろうと思います。

それから、私は、勉強以外の面でも給食委員長として、一年間頑張ってきました。給食委員長は、毎日仕事があって、どの委員会よりも大変だったと思うほどとてもきつかったです。でも、私は給食委員長をして後悔していません。なぜなら、苦労の中にも楽しさがあったし、給食委員として三年間頑張ったことで、責任感も養われたからです。でも、まだ仕事は終わった訳じゃないので、最後まで委員としての自覚を持ち頑張りたいと思います。

最後に、卒業まで期間もないので、残り少ない中学校生活をより充実したものにできるよう、一分一秒に全力を尽くし、みんなといる時間を大切に過ごそうと思います。

3学期に向けて…

１月９日(火)の始業式の中で３人の生徒が「３学期に向けて…」それぞれの学年の立場から発表をしてくれました。１年生は勉強、部活、日頃の生活態度について、２年生は、生徒会活動への取組、３年生は、受験に向けての決意についての発表でした。

中でも、３年生の鍛島さんは、原稿を見ないで、聞いている人達の方をしっかり見て発表しました。受験で面接があるので、それを意識した発表だったと思います。強い決意を感じることができました。



三学期の抱負

一年　葭岡

私が三学期にがんばりたいことは、生徒会の議長として、六中を引っ張っていくことです。もともと、リーダー的な仕事は苦手でした。しかし、生徒会演説で吉永さんの応援者を務めてみて興味を持ちました。それから議長になりたいという気持ちが強くなり、立候補しました。まだ、議長としてしっかりやれるか不安なところもありますが、私にできることを一生懸命していこうと思います。

冬休み中に生徒会執行部のリーダー研修会があり、校長先生の話を聞いたり、自分たちで今後の六中について話し合いをしたりしました。まだ、たくさん改善するところがあると分かったので、生徒会が中心となり、それらを改善していけたらと思います。

最後に、私はみんなが楽しくなるような一年にしていけたらと思います。また、一・二年生が委員長、副委員長になるので、私たちでこの六中を明るく楽しくしていけたらいいなと思います。

大野勝彦さん講演会を実施

大野勝彦さん（７４歳）は、菊池郡菊陽町でお生まれになりました。高校卒業後、実家の農業（ハウス園芸）を営まれていました。しかし、４５歳の時、トラクター用肥料散布機を清掃中に手を巻き込まれて両腕（肘関節から下）を切断されました。悔やんでおられたのが、「トラクターを清掃している時はスイッチを切った状態だったが、肥料散布機を清掃する時はいちいち回すのが面倒臭いため、スイッチを入れた状態で清掃をしてしまった。」ということでした。

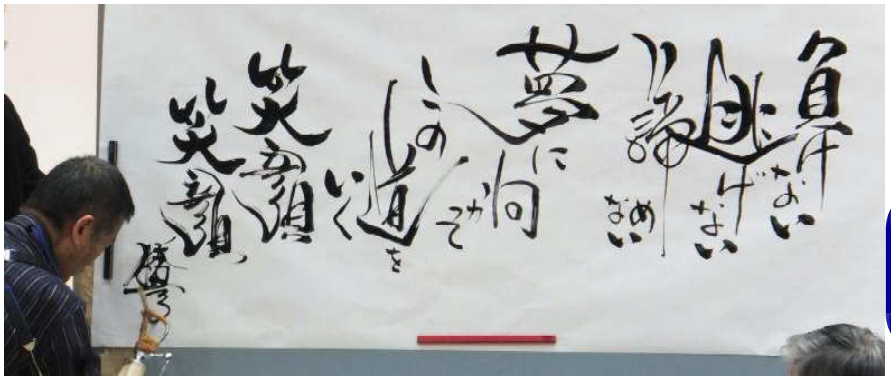
駆けつけたお父さんやお母さんが卒倒する中、この日たまたま部活がなかった中学三年の息子さんが早く帰ってきて、救急車を呼び、救急車が来るまで、気丈にも大野さんの大量の血で染まった両腕を高く持ち上げて、「父ちゃん、がんばらないかんよ！」と声を掛け続けてくれたそうです。

手術は７時間かかったそうです。お母さんはスイッチを止められなかったことを悔やみ、泣き続けられたそうです。また、「３人の子どもさんたちは、病室では明るく振るまってますけど、部屋を出たら全員ハンカチで目を押さえて泣いていましたよ。」という話を看護師さんから聞かれたそうです。そんな時、子どもたちから「今度の事故でわかったこと。お父さんは強い人です。お父さんはなくてはならない人です。お父さんは尊敬できる人です。」という手紙をもらい、生まれて初めて胸を熱くされたということです。家族の優しさに気付き、入院の三日目に妹さんから腕に筆ペンをくくりつけてもらい字を書き始め、現在までの２９年間、義手を付けて創作活動を続けておられます。


大野勝彦さん

大野さんの活動内容は、詩画の個展、詩画集、本の出版。全国各地での講演会の開催など幅広く行っておられます。特に講演会は３０００回目の米国ロサンゼルスなどの海外も含め、すでに４０００回を超えておられるそうです。また、北島三郎さんなどが所属するクラウンレコードから平成１１年に「ありがとう人生」というＣＤも全国発売されています。

事故からずっと責任を感じておられるお母さんを元気づけるために美術館を作ることを約束し、約束から１５年後、風の丘 阿蘇 大野勝彦美術館を開館されました。



←学校に寄贈された書
（職員室前に掲示）

講演を聴いた生徒の感想をいくつか次号に掲載します。